

中国での早生樹の資源造成と加工・利用

瀧澤 忠 昭

2000年3月3～11日にわたって、中国南京林業大学と江蘇省北部地域において、ポプラなど早生樹の資源造成と加工・利用に関する日中国際研究集會が開催されました。

中国では、1975年に南京林業大学の研究者により、イタリアからポプラが導入され、造林が進められていました。

この研究集會は1994年から中国で6回にわたって行われた現地調査の内容の総括と、人工造林された早生樹資源の現状と将来、中国およびアジア地域における市場、需要構造の動向を考察・検討し、将来の事業化への足掛かりとすることを目的に開催されました。

研究集會前半の研究発表では基調講演のほかに、早生樹資源の造成、早生樹の加工・利用など21件の発表がありました。

このように、ゼロから出発し、20年足らずの間に持続的資源造成の基礎が確立し、その加工・利用が進んでいる現在、「中国でのポプラなど早生樹の資源造成と加工・利用」には国の内外から多くの関心が寄せられています。

以下、この発表からくみとれる早生樹の育成と利用に関する中国の取り組みを紹介します。

ポプラの導入と育成

1975年に導入されたポプラは、イタリアに生育していた米国産のイースタンコottonウッド(*Populus deltoides*)と欧州産のブラックポプラ(*Populus nigra*)でした。中国ではこれらをイタリーポプラまたは暖帯系ポプラと称しています。

ポプラの育成は、最終用途に最適な材を生産するためにクローンの選択、立地の選択、密度管理等を検討し、栽培の最適化モデルをつくるという目標を明らかにして進められています。

今回の発表では、イタリーポプラの主要クローンについて検討し、合板製造を目的にした品種I-69のいく

つかの栽培モデルのうち最も有利な方式を具体的な数字で示した報告がなされました。また、最近、米大陸から直接導入を続けているイースタンコottonウッドのクローン数種類について、単板用材としての利用の優劣に大きく影響する樹幹の形状を徹底的に解析した結果も報告されました。

ポプラは1982年には国家により「平原緑化」樹種に指定され、I-69、I-72、I-214などの品種が黄河、長江の中流域に広範に造林されました。

ポプラの造林面積はすでに300万haに達しています。I-69、I-72、I-214などの品種は成長が早く、植栽密度が600～620株/haの場合には、年間成長量は約20m³/ha、胸高直径は5年生で18cm、10年生では35cmに達します。

1980年代中期に江蘇省北部に植林されたポプラはすでに伐期が来ています。伐採して売られた原木はかなりの利益をもたらし、これにより、造林意欲が触発されました。

ポプラの利用、用途開発など

南京林業大学、中国林業科学院などは、ポプラの性質および用途開発の研究を行いました。その結果、ポプラはロータリー切削と接着が容易で、理想的な合板原木であると評価しています。さらに、ブロックボード、MDF、パーティクルボード、LVL、PSL、経木などの製造に利用できるとしています。

今回の発表では、ポプラ材の乾燥、OSBの製造と利用についての報告がありました。

また、ポプラ製品の加工・利用の概要、ポプラを原料とする合板、ボードなどの輸出の現状と今後の展望についての報告もありました。

これらの報告から、中国におけるポプラをはじめとした木質材料の製造・利用技術の現状や問題点、輸出の動向などが理解できるものと思われます。

参考資料

- 1) 早生樹協議会編：Fast Growing Trees, No.8 (2000.Aug.)

(林産試験場 利用部主任研究員)

キーワード：早生樹、ポプラ